

1・17神戸

「合掌の姿勢で支援を」

宗派超え全国から七百人

一周忌法要

兵庫県南部地震の一周忌に当たる十七日、神戸市内で宗派の枠を超えた慰霊行脚と一周忌法要が厳修された。「阪神・淡路大震災一周忌全国仏教徒慰霊行脚・神戸結集」として全日本仏教青年会・神戸市仏教連合会の主催で執り行なわれたもので、予想を大きく超え一般檀信徒を含め約七百人が全国から参加。七コースに分かれて市内を行脚した後、兵庫区松原通の時宗真光寺で追悼法要を営んだ。震災被災者支援活動などを通じて新たな超宗派の連帯も生まれつつあるが、それをいっそう固める意義深い法会でもあった。

この神戸結集には地元神戸の市仏運、青年仏教徒会、仏青の他、全日仏青傘下の真言宗、天台宗、浄土宗、同西山禅林寺派、日蓮宗、曹洞宗、浄土真宗本願寺派（東京教区）など各宗派の青年僧の会及び埼玉、神奈川、大阪各府県仏青が参加（以上、主催）。また、ボランティア組織のNGO RACK、南無の会、臨済会、妙心寺派兵庫教区（以上、共催）、全日仏、花園大学、佛教大学、ボランティア大阪（以上、後援）の関係者も荷担し、各地から集まった参加者は前夜から市内寺院等に分宿した。

一年前のこの日、大地震が神戸を直撃した午前五時四十六分。東灘区・西福寺、灘区・理性院、中央区・西方寺、兵庫区・海福寺、長田区・感応寺、同・明泉寺、須磨区・須磨寺の七カ所に分かれて法要を厳修。各寺院に結集した僧侶は黎明前の六時を期して、市内行脚に出発した。

行脚は三～四時間の道程。「阪神淡路大震災物故者一周忌神戸結集」と記した櫓をかけた参加者は読経しつつ市内を回り、所々で犠牲者遺族の依頼に応じて回向を行ないつつ一周忌の慰霊法要が執り行なわれる真光寺へ向かった（別項参照）。

真光寺は一遍上人の御廟があることで知られる時宗の名刹。震災で倒れた五輪塔は既に修復されていたが、鐘楼堂は基壇のみが残り地震の記憶を伝えている。法要の会場は当客殿・光明殿前の野外に設営され、巨大な角塔婆が建てられた。

同寺には午前十時前後から行脚を終えた僧侶や檀信徒が集結。法要に先立って時宗の踊り念仏（時衆踊躍念仏）が執り行なわれた。この間も網代笠、草鞋履の臨済宗の雲水など荷担の僧侶が続々到着し、用意された椅子は満席となった。

法要は午前十時半から始まり、当日の行脚に参加した一檀信徒によって綴られた被災体験手記を司会者が朗読。次いで三歸依文が唱和され、大導師の広瀬照晴神戸市仏教連合会会長、協導師の水谷栄寛全日本仏教青年会理事長、明石和成社団法人神戸青年仏教徒会理事長が散華しながら会場に入り、着座した。

大導師の広瀬会長が表白文を唱え、続いて般若心経、無量寿経の重誓偈、法華経の自我偈が読経され、この間に河野太通花園大学学長（祥福寺専門道場師家）から始めて参列者が順次、焼香台前に参進し焼香を行なった。そして最後に全員で「南無本師釈迦牟尼仏」を唱え、宗派の垣根を超えた形式で営まれた法要が円成した。

このあと、水谷全日仏青会長が挨拶を行ない、「セクトに分かれ横のつながりをもてなかった仏教界が、震災被災者支援活動では宗派を超えたさまざまな縁でつながれた。震災一年目に当たって神戸青年仏教徒会や神戸市仏教連合会から慰霊行脚の提案があり、今日はこうして七百人以上の僧侶、一般市民が早朝から行脚を行なった。これで連帯の輪が全国に広がったと思う」と“神戸結集”の意義を強調。

さらに「右と左の掌を合わせ、その温もりを絶やさぬようにするのが合掌というもの。われわれ仏教徒として

は、今後も“合掌”の姿勢で神戸の人たちと関わってゆきたい」と述べ、一周忌法要以降の被災者支援活動のあり方について示唆した。

埼玉県仏教青年会の羽生裕彦会長から水谷会長に義援金として二百万円の目録が贈呈された後、神戸青年仏教徒会の明石理事長が「テレビでみた神戸と実際に歩く神戸は違う、ということを実感されたのではないか。現地ではこれからが本当の復興になる。神戸市民が手を携えて歩いてゆけるよう、ご支援ご指導を御願います」と謝辞を述べ“神戸結集”を締めくくった。

超宗派の連帯も感じられた－真光寺での追悼法要【写真は省略】

「導師表白文」

謹み敬って、真光寺御本尊の宝前に伏し、恭しく十万三世の諸仏・世尊別しては天神地祇を拝し奉り、白して言さく。

我等仏弟等、今茲に平成八年一月十七日、阪神・淡路大震災物故者一周忌を迎え、道場を荘厳し、香華を献じ、三業清浄にして恭しく如来に帰命し奉る。

時の流れるは早く、空前絶後の大震災より丸一年、六千三百有余の尊い生命が瓦礫の下に押しつぶされ、迫りくる猛火に苦しみながら消えてしまいました。またその後あとを絶たない孤独死、関連死、さまざまな人の死を見つめなければなりません。この悲しみは復興に向けて歩み始めた私達にとって、生涯忘れてはならないことであります。

今、ここに釈迦牟尼世尊の弟子等、全国の仏教徒、老若男女が神戸に結集し、市内を行脚しつつ、亡くなられた方々への菩提を弔う。さらにここ真光寺に結集し、現前の清衆等、一心に掌を合わせ読経回向するも是仏のみ教えなり。

伏して冀わくは、此の功勲を以て如来大悲の慈光を仰ぎ、物故者有縁無縁の諸精霊等、齊しく如来の光触を蒙り、皆休息を得て速やかに不退の聖果を獲得し、永く法性の常楽を得せしめ給わんことを謹んで疏す。

維時平成八年一月十七日

神戸市仏教連合会

会長 広瀬照晴

敬白

各所で回向の読経

遺族らに見送られて歩む

爪痕消えぬ東灘区を行脚

兵庫県南部地震の一周忌に当たる十七日、全日本仏教青年会と神戸市仏教連合会などが主催して神戸市内の七カ所に分かれて朝六時から「全国仏教徒慰霊行脚神戸結集」を実施。このうち住宅が密集していたため大勢の人が亡くなり、いまだに震災の爪痕が至るところに残る東灘区を行脚する東灘コースは、浄土宗西福寺（東灘区魚崎北町三）に約九十人の僧侶が結集した。

同寺は震災で本堂等が全壊し、庫裡で寝ていた伊藤省三住職が亡くなった。「あまりのことにしばらくは何が起ったのか理解できませんでした。ようやくこのごろ父が亡くなったという実感が湧くようになりました」と語った伊藤住職の長男・省吾さん（二四）は、昨年急きょ知恩院での加行を済ませたばかり。弟の寿昌さん（一九）とこれから一緒に今回の行脚に参加するという。

五時四十六分、プレハブの小さな仮本堂に安置された阿弥陀如来の尊前に向かって全員が一心に読経。慰霊法要の後、すぐに身支度をととのえ行脚に出発した。光明真言を唱えて暗闇を進む中で、一人の女性が目を真っ赤にしながら駆け寄ってきた。

「そこで大勢の人が亡くなったんです。何とかご回向して頂けないでしょうか。お願いします」

この懇願を受け一行が急きょ立ち寄ることになった路地には、プレハブの脇に果物や菓子が並べられていた。待ちかねていた男性が口ウソクをともし、行脚の僧侶から渡された塔婆に震災犠牲者の戒名を書いた。大勢の僧侶に般若心経を上げてもらって「本当に有り難うございました」と涙ながらに合掌する遺族に見送られ、さらに先へと進んだ。

五十四人が亡くなったといわれる本山中町のある通りに差し掛かると、一段と真言の響きが高まった。さらに国道2号線を歩いて、倒れたままの「国道地蔵」で読経し、中野南公園に向かう頃になると徐々に白みはじめてきた。

本山南町の中野南公園では、かつて自衛隊の張った二十五張りのテントで暮らし、被災者を元気づけるための祭りなどを行なった人たちが火を焚いて待っていた。地面には、「忘れないで...神戸」と大きな白い文字。僧侶代表が祭壇で焼香を行ない、一同が読経すると、小さな子供まで黙祷した。この公園に行脚が立ち寄ることを耳にしたという一人の年配の男性は、朝早く起きて芦屋から自転車を漕いで駆けつけたという。妻を震災で失い、「一周忌の法事は済ませたけど、やはりこの日に冥福を祈りたかった」と塔婆を書いて少し肩の荷が下りた様子。

公園を後にした一行は阪神電車石屋川駅の北にある高野山真言宗理性院まで、真言を唱え各所で回向しながら整然と歩き続けた。

震災で新築したばかりの本堂など諸堂が全壊・全焼したという理性院では、プレハブの本堂と庫裡が建っている。近くの阪神電車の急ピッチな工事の音に比べ、まだまだ復興は先になるようだ。境内に立っている焼け残った観音像に向かって慰霊の読経を唱え、行脚が成満したことを奉告した一行は休む間もなく合同法要が行なわれる兵庫区の真光寺へと向かった。

遺族に乞われ14人が亡くなったマンションの跡地で読経【写真は省略】

(c) 1996中外日報社(デジタル化：神戸大学附属図書館)